



愛知一中・旭丘野球倶楽部OB インタビュー（第1回）：井戸田晴斗さん（77期）

記念すべき第1回は昨年エースとして大活躍し、国立大学野球部の強豪筑波大学に進学した井戸田晴斗さんです。

77期 井戸田晴斗が語る現在地と未来

「小学2年で野球を始め、中学では腰を怪我して野手に。旭丘で再び投手へ。自ら調べ、自分を鍛え、球速は125kmから140km超へ。筑波大学で投手として挑み続ける選択と未来について語る。」

プロフィール

- 氏名：井戸田 晴斗（いどた はると）
- 期：77期
- 出身：長久手南中／豊田リトルシニア
- ポジション：投手
- 高校最速：144km
- 進学：筑波大学（硬式野球部）



1. 再びマウンドへ

—今までの野球人生を振り返ってどうですか？

「小2で野球を始めて、小3から投げていました。でも中学で腰を怪我して野手に転向。高校では『もう一度ピッチャーをやる』と決めて旭丘に入りました。最初は125kmくらいで活躍できなかった。冬に一年上の近藤嘉紀先輩に学び体幹を鍛え、130kmを超えて、翌年にはさらに自分なりに工夫を加え140kmまで伸びました。」



2. 自分で考え、工夫したメニュー

—高校時代はどんな練習をしてましたか？

「投手のメニューは任せられていたので、自分たちで考えました。ウエイトを中心に、アグリティやウォーターバッグで体幹を強化。ランニング、ハードな往復ダッシュ。トレーニング方法やフォームなど自分で調べて試すスタイルでした。」

3. 試合で学んだエースの強さ

—旭丘野球で学んだことは何ですか？

「秋大と春大では連戦になると後半で崩れるのが課題でした。自分がマウンドを降りて負ける。エースとしてまだ弱いと痛感しました。だから『最後まで投げきる』ことの大切さを学びました。夏の市邨戦ではやり切れたと思います。大成戦は悔しかったけど、自分としては秋春からの成長を示せたと思います。」



4. 旭丘を選んだ理由

—いつ旭丘で野球をやりたいと思いましたか？

「小学生のときから『旭丘に行く』と言ってたみたいです(笑)。中3の夏に大会を見に行って、チームの雰囲気が良いと感じました。旭丘は私服で登校できることもよく、『とにかくトップを目指す』という思いで公立一本、私立は考えませんでした。勉強で進学し、野球も全力でやれると思いました。」

5. 勉強との両立

—旭丘を目指す上でどのように勉強と両立をさせてましたか？

「中学時代は所属クラブチームが強くてテスト前でも土日は1日試合と練習。平日も夜間練習や自主練でまとまった勉強時間はあまり取れなかったので、すきま時間を徹底的に使いました。週1回塾に行き、質問しまくってました。課題や提出物は早めに対応するように心がけていました。」





6. 筑波大学を選んだ理由

—大学でも野球を続ける事、そしてその場所として筑波大学を選んだ理由は何ですか？

「最初は野球をやめて医学部に進みたいと思っていました。でも夏の大会以降、いくつかの大学から声をかけていただき、2ヶ月ほどすごく悩みました。中埜監督や筑波OBの宮本先生、家族にも相談し、自分がどこまで通用



するのかやってみたくなったことと、野球をもっと高いレベルでやりたいという理由で野球を続けることにしました。『宮本先生、中埜先生には今本当に感謝しています。』大学選択では「自主性を大事にする筑波なら旭丘のスタイルと合っているのではないか」と勧められ、見学に行って決めました。川村監督から声をかけていただいたのも大きかったですね。」

7. 大学野球で感じること

—実際入部して見て大学野球はどうですか？

「レベルが違います。スイングも全然違う。木製バットだと、投手からすると『芯を外せばいい』ですが、その分バッターも強い。足も速く、スピード感が全然違います。」「それに筑波は150人以上いる大所帯。一人の姿勢がチーム全体に影響します。組織としての重みを実感しています。人生初の寮で生活しながら7~8割は野球が基本です。」

8. これからの目標

—今の目標は何ですか？

「リーグ戦で勝てる投手になること。そのためにまずチーム内の競争に勝つこと。入学して最初の2ヶ月は新人練、その後はAチームに入りました。その後怪我で今はBチームですが、秋の終盤から春にかけてAに戻れるか勝負です。将来は社会人も視野に、可能ならプロを目指したい。『投手一本』でいけるところまで続けたいです。」





9. 旭丘野球部への思い

一旭丘野球部を振り返って今思うことは?

「旭丘は勉強も野球も伝統がある。野球が強ければ『眞の文武両道』ができると思います。強豪に勝てれば、勉強も野球も本気でやりたい中学生が入ってきてくれると思います。より強いチームになって活躍してほしいです。」



10. メッセージ

一県大会に向け頑張っている現役生、将来の旭丘野球を目指している世代に一言お願いします。

「現役生には『秋の県大会、そして来年の夏大は本当に頑張ってほしいです。現役が力を出すことで次の旭丘はもっと強くなれる』と思います。小中学生には『学校生活が圧倒的に楽しい』と言いたいです。自由度が高いし、野球も真剣にできる。『勉強も野球もやりたい人には旭丘は最高』と伝えたい。同期のレベルも高く、いい仲間に出会えると思います。」

【井戸田 10 のサプリメントメモ】

1. 「特定の“推し”は作らず、**自分の描く理想と比べることが多いです**」
2. 「ネットで調べて**自分に合う選手、練習方法を学ぶことが多いです**」
3. 「性格的には、良くも悪くも**冷静です**」
4. 「理想と現実がズレると**内心はイラッときますが、外には出さないです**」
5. 「思考的には、**ポジティブ思考**です。色々言われても受け流すタイプですね」
6. 「周りからは**もっと深く考えなさい**と言われることもあります」
7. 「迷ったら**真っ直ぐ**で勝負します」
8. 「最近の練習の重点ポイントは**下半身強化**です」
9. 「できるだけ早く**150km**に近づき、クリアしたいと思っています」
10. 「せっかく関東に来たので学生の間に**色々な人(大人)の考え方や意見**を聞いてみたいです」



編集後記

インタビューを通じて、自分はこうありたいという自分なりの『美学』のようなものを常に持っている青年というのが一番の印象です。恐らくそれは小学生の頃から旭丘に行きたいという志高い少年が、中学時代によもやの大きな怪我に苦しみ悩んだ。でもそこで必死に自分と向き合い試行錯誤を重ねたことで、逆境をバネに心の持ち方を一段も二段も深化(進化)させることができた。そうした積み重ねが結果的にマウンド上の孤独を支える強さの源になっている、そう想像しました。

「僕、教えるのも好きなんです！」と笑顔で話してくれたのもきっと自分で考え、試してきたからこそそうした経験を誰かに伝えたいという彼のもう一つの楽しみでもあるのだろうと思います。

将来は地元に戻る？という問い合わせに「はい」と即答していたので、ミットの向こうにある青桐のユニフォームの数年後には青竜のユニフォームか黒鯢のユニフォームに袖を通してグランドに立つ姿が楽しみ、と若い希望を強く応援したい気持ちで一杯になりました。が、決して無理はせずに自分の間合いで進んでいってください。（44期 前田晃洋）

